

医学ひとすじ — 坪井信道^{しんどう}

坪井信道は、寛政七年（一七九五）一月二日、揖斐郡脛永（今の揖斐川町脛永）の四男として生まれました。

十歳のとき、父を亡くし信道は、長浜の福寿院の兄の所へ引き取られた。ここでの生活は、水くみ、めし炊き、境内の掃除、洗濯など、遊び盛りの子供にとっては、苦しい生活の毎日だった。しかし、信道は、よく仕事にはげみ、一度も不平らしい顔つきをしなかった。

十二歳のとき、名古屋にいる母の大病が知らされ、すぐさまかけつけた。病の床にあつた母に対して、彼はやさしい言葉をかけたり、心をこめて足をさすったりして看病を続けた。

「かあさまを助けてください。かあさまを治してください。」

と、一生懸命^{いっしょうけんめい}祈りをささげた。

しかし、とうとう母は、亡くなってしまった。父を亡くし、まだ、その悲しみが消えないうちの母の死ただけに、信道の悲しみは、とても大きかった。

だが、いつまでも悲しみに沈んでいてはいけないと気を取りもどした。立派な人になってほしいという父の教えを思い出し、やさしい母を救えなかつたくやしきから、医者になろうと決心した。そのときから、彼の努力が始まった。

二十一歳のとき、九州で、江戸の蘭学者宇田川^{うだがわしん}榛^{あし}斎の書いた「医範提綱」に書かれた人体の図は、今まで中国の医書で見たものや、自分で想像していたものとは、似ても似つかぬものであった。

「医学というものは……。」

と、信道は考えた。



「病気を治して、健康体を取りもどすためのものだ。それには、人間の健康体がどうなっているのか知らねばならぬ。にもかかわらず、今まで自分が習った東洋の医学では、人体の構造などには知らぬ顔だ。肝臓が右にある、いや左だ、肺臓が二つだ、いや四つだといつて争っているありさまだ。そんなことで、どうして人間の病気が治せるのか。が、西洋では、これほどくわしく人体の構造が研究されている。」信道の心は、ぐんぐん西洋の医学の方にひつばられていった。

「自分の求めていたものは、これだったのだ。蘭方医学の研究こそ、自分が一生をかけてする仕事なのだ。」

と、固く決心した。

二十六歳のとき、信道は、宇田川塾へ入門した。朝早く間借りをしていた寺を出て、二里の道のりを、雨が降っても、風が吹いても、毎日欠かさず往復した。昼食抜きで、猛勉強の日々を送った。なによりもこたえたのは、半年の間に、用意していた学資金を使い果たしてしまったことである。そこで、一か月五百文の家を借り、未明から塾に行き、午後八時の門限まで授業を受け、それがすむと街へ出た。

街へ出ると、信道は風呂敷包みから一本の竹の小笛を取り出した。信道の吹く笛の音は、毎夜、神田から本郷、本郷から下谷へと寝静まろうとする街を流れていった。

「あんまあ、かみしも。」

「四十八もくん。」

こうして、夜遅くまで働き続けた。そのお金で、家賃を払い、灯油を買い、米も買った。

朝には一杯のかゆをすすり、夜には芋をかじって、夜明けまで勉強した。

あるとき、お金がなくて食事もできず、塾で意識不明になったことがあった。

「坪井君、顔色がすぐれぬぞ。」

「どこか、具合でもわるくはないのか。」

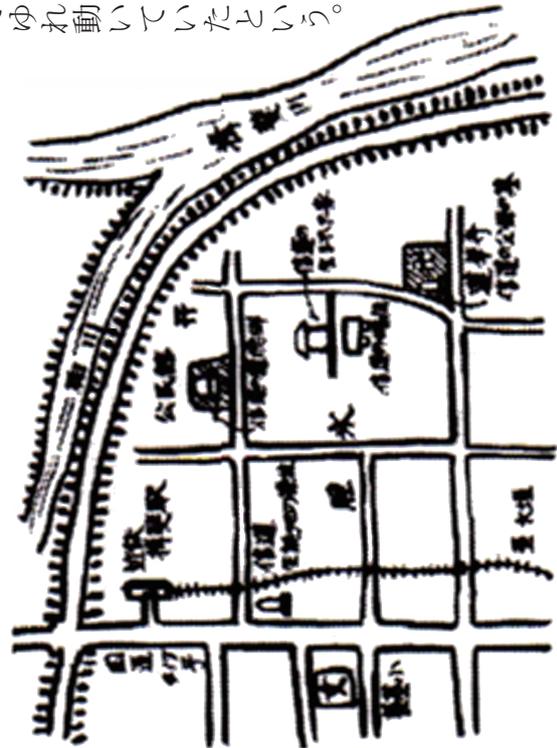
と、学友が心配したが、信道は、つらさや苦しさを他人にうつたえることはしなかった。病気で苦しみ、どうすることもできずに死んでいった母の顔を思い出し、貧困・疲労とたたかいながら勉学にはげんだ。

こうした信道の様子を見かねた師の宇田川榛齋は、内弟子として、塾で生活させることにした。食べることの心配がなくなった信道は、勉強一途に打ち込むことができた。同僚が夜中に目をさまし、玄関の方を見ると、熱心に学問をしている信道の影が、毎夜、障子に映ってゆれ動いていたという。

こうして、宇田川塾で七年の間、蘭方医学の勉強を続け、医者として、押しも押されもしない実力を身につけた。

やがて、三十三歳になって、江戸の深川で診療を開始し、蘭学塾を開いた。

信道の名声を聞きつけて、患者も塾生もどんどんふえ、「江戸の三大蘭方医」として、その名前は天下に知れわたった。



出典 岐阜県教育委員会 郷土の道徳「郷土史研究にうちこむ」

(平成十三年十一月)